

堀河百首題「海路」をめぐって

内藤愛子

堀河百首題の雑は二十歌題ある。そのうち、「山」「河」「関」「橋」「海路」の六歌題は、既に私が指摘したように歌枕、地名、名所が歌題設定に重要なポイントをしめている歌題であり、それらは、意識的に配列された歌題と考えられる。⁽¹⁾その六歌題のうち、今回は「海路」の歌題を取り上げて、そこに詠まれている歌枕、地名、名所の特性を抽出し、その歌題の特徴を考えてみたい。

「海路」は、堀河百首題と共通する歌題が多数見い出される『和漢朗詠集』には見られない歌題である。しかも、「堀河百首」成立以前の勅撰集や歌合、百首歌等の主題、歌題として見当らない。『古今和歌六帖』の第三帖には、「海」や「舟」という分類が成されているが、「海路」という分類は見られない。また、『堀河百首』と共通の作者が含まれる『永久百首』の雑の歌題には、「水海」「泉郎」「船」という歌題が見られる。

また、「海路」という歌題は、『平安和歌歌題索引』に拠ると、「堀河百首」以後の勅撰集に歌題としては見られない。だが、私家集において、『堀河百首』詠出歌人以外の私家集では、『行宗集』、『六条院宣旨集』、『太宰大式重家集』、『前参議教長卿集』、『長方集』、『五社百首』、『秋篠月清集』、『拾玉集』に歌題として見出される。それらは「海路」という独立した歌題としてではなく、堀河百首題の歌題としてみえ、百首歌のような定数歌の歌題とされている。それらは、少なからず、堀河百首

題の影響に拠るものと捉えられるであろう。

単題が多数を占めている堀河百首題の雑の歌題において、「海路」という歌題は、「海」という単題ではなく、「海路」としたところに新奇なものを求めた歌題設定であったと推察される。

その「海路」という歌題を出詠歌人達はどのように捉えて詠んだかをみてみよう。

まず、「海路」の十六首の詠歌を具体的に検討してみよう。前述のとおり、歌枕、地名、名所が詠まれ、それと共に船種が詠み込まれている歌が多数見られる。また、そのほとんどが、航海の有様や海上を航行する船の様子に景趣を盛り込んだもの、出航の様子や船旅に出る都への思い等を詠じている。

具体的に船種を詠じたものとしては、「棚無し小舟」(144)、「大御舟」(145・146)、「柴舟」(148・149)、「筑柴舟」(145)、「高砂の舟」(145)、「蚕の小舟」(145)である。そのうち、「大御舟」「柴舟」「高砂の舟」は、勅撰集に詠まれておらず、「柴舟」「高砂の舟」以外は『万葉集』に見られ、『万葉集』を意識した歌語であると言える。

次に、「海路」に詠まれている歌枕、名所、地名を中心に見てみると、歌枕、名所、地名は十六首のうち十首みえ、それは次のようである。それらは「武庫の浦」「淡路の瀬戸」「伊良湖岬」「絵島ヶ磯」「猪名野」「奈呉の浦」「もとめ塚」「由良の門」「大島」「天の橋立」であ

り、それらのうち、「大島」以外の歌枕、地名、名所は、散見するところ
 ろに拠ると、『堀河百首』成立以前の勅撰集には詠まれていないもので
 ある。それら歌枕、地名、名所の各々を具体的に検討してみると次の
 ようである。

まず、それらのうち、『万葉集』に典拠を求められる歌枕、地名、名
 所として「武庫の浦」「奈呉の浦」「もとめ塚」が上げられる。

「武庫の浦」は、摂津の国武庫郡に面する海で、『万葉集』(361・360・
 3617)に見え、散見するところに拠ると、勅撰集、私家集に詠まれた例
 は見当らず、『万葉集』を典拠としたものと言えるであろう。「武庫の
 浦」を詠じたのは次の藤原公実の歌(1441)のみである。

1441 かさはやの沖津塩さひ高くともいたてにはしれむこの浦まで

初句の「かさはや」は、歌枕として捉えられ、風早がどこであるか
 は諸説ある。この歌は、歌枕、地名と風が激しく吹くことを懸けて、
 心急ぐ船旅の風情を詠じている。「風早」は、『万葉集』(437・1232)に、
 「風早の美穂」とあり、いずれも『万葉集』に典拠した歌枕、地名、
 名所である。「風早」に関しては、田尻嘉信氏が諸説を挙げて詳記して
 いるのでご参照を願いたい。

「奈呉の浦」は、『八雲御抄』に「越中、摂津にも丹後にもあり」と
 ある。『万葉集』において、「奈呉の浦」の詠歌のうち、4057・4237の二首
 は、越中の歌であり、1153は摂津を詠んだ歌である。『堀河百首』成立以
 前の勅撰集において「奈呉の浦」の歌枕、地名、名所は見当らず、『伊
 勢集』(383)、『私家集大成中古I』51)に一首見え、同歌は『古今和歌
 六帖』1883、第三帖の「うら」に入集されている。

383 きてみればなこの浦までよるかひのひろひもあへす君そ恋しき
 この詠歌は、『万葉集』4057の二、三句目の表現を用いたり、「貝」の縁
 語「拾ふ」を用い、技巧的に仕上げている。

4057 波立てば奈呉の浦廻に寄る貝の間なき恋にぞ年は経にける

また、『散木奇歌集』(『私家集大成中古II』62)には、「奈呉の浦」
 を歌題としている歌が一首(1309)見出せる。この歌の「奈呉の浦」
 は、越中、摂津のいずれかは明確に判断しにくい。

なこのうらといへる事をよめる

1309 なこの浦の音さへけさは激しきにかに鳴門のをきさはくらん

『堀河百首』において、「奈呉の浦」は藤原仲実の歌(1447)に
 1447 こしの海あゆの風吹なこのうらに舟はとくめよなみ枕せん

とある。この歌は、『万葉集』の大伴家持の歌(4041)に発想を求めてい
 る。この「奈呉の浦」は、『越の海』あゆの風から越中であること
 がわかる。

4041 あゆの風いたく吹くらし奈呉の海人の釣する小舟漕ぎ隠る見ゆ

このように、「奈呉の浦」は、『万葉集』に典拠を求めた歌枕、地名、
 名所であり、『堀河百首』詠出歌人達には、少なからず関心のもたれた
 歌枕、地名、名所と言えよう。

次に、「もとめ塚」は、やはり『万葉集』(1805・1806・1813)に見出せる
 が散見するところに拠ると、『万葉集』以外には証拠が見当らない。ま
 た、「もとめ塚」は、菟原処女の塚であり、『大和物語』147段にも、菟
 原処女の伝説がみられる。それらを典拠とした歌枕、地名、名所と捉
 えられるであろう。

『堀河百首』において、「もとめ塚」を詠じたのは、源俊頼の歌(1448)
 のみである。

1448 もとめ塚おまへにかゝる柴舟のきたけになりぬよる方をなみ

この歌は、『袖中抄』第十三に難解な歌語の典拠歌として「もとめ塚」
 が掲出され、「今案云、女墓をば万葉にはをとめづか、をとこのつかを
 ば男づか也。大和物語には女のつかをばをとめづかと読り。俊頼歌
 は物語によれり。をとめ(を)もとめと書敷。をとめと同響也。」とあ
 る。

「海路」の俊頼の詠歌は、「もとめ塚」や「柴舟」という俊頼独自の新奇な歌語の工夫に拠って舟の難航している有様を描いている。それは、典拠をふまえた新しい趣向の歌である。

「もとめ塚」を詠じたのは、源俊頼の歌のみに見え、しかも、『散木奇歌集』(1381) 雑部に「もとめ塚」という歌題が見出せる。

1381 たちねも求めさりせはをとめこと跡にも影をならへましやは
このように、「もとめ塚」は、『万葉集』や『大和物語』等の菟原処女伝説を発想の典拠とし、源俊頼が注目し、独自に詠まれた新奇な歌枕、地名、名所の一つと言え、新たな歌枕、地名、名所に拠る詠歌世界の拡大を意図したと言えるだろう。

「天の橋立」は、『堀河百首』成立以前の勅撰集において散見されないうが、私家集では歌枕、地名、名所として見え、名所題の一つとして見出せる。また、歌合においては「海人橋立」という歌題で、康平六年十月三日丹後守公基歌合(『平安朝歌合大成』178)にある。

『順集』261(『私家集大成中古I』95)の詞書に「永観元年、一条の藤大納言のいゑ、寝殿の障子に国々の名あるところをゑにかけると、つくるうた」とあり、「天の橋立」は障子の名所絵の一つであり、障子歌の名所題とされていた。

261 みつ塩ものほりかねてそかへるらし名にさへ高きあまのはし立
また、『能宣集』195(『私家集大成中古I』117)の詞書は、『順集』261と同様で障子歌の名所題の詠歌が見られる。

195 よさのうみのあまのはしたて見わたせはかたゝなみをわくるし
めかも

また、『和泉式部集』47(『私家集大成中古II』1)の詞書に「丹後にくたるに、宮よりきぬあふき給はせたるに、あまのはしたてかゝせ給て」とある。

47 秋きりの隔るあまのはしたてをいかなるひまに人わたるらん
このように、「天の橋立」は、画題や扇の名所絵として、かなり普及されてきたようである。

『堀河百首』において、「天の橋立」が詠まれている歌は二首挙げられ、「霞」(40)と「海路」(144)に見える。

40 波たてる松のしづえをくもてにてかすみわたれる天の橋立
144 舟とめてみれともあかす松風に波よせかくる天のはしたて

いずれも、松と共に詠まれ、「天の橋立」は白砂青松の美景であるという景趣を盛りこんだ詠作である。殊に、松と共に詠み込まれた例が多くみられる。それは、「天の橋立」が歌枕、地名、名所として定着するに際して、少なからず障子や扇等に描かれた名所絵との影響関係を見無視することは出来ないように思える。

紀伊の歌(145)は、船上から見た絶景なる天の橋立の叙景歌の趣がある。

また、天の橋立は、『万葉集』に見られず、比較的新しい歌枕、地名、名所であるが、障子歌や名所題などに見え、かなり詠まれていた歌枕、地名、名所と言えるであろう。

「淡路」に関連した歌枕、地名、名所は、『万葉集』において、「淡路島」(391・940・1184・3211・3742・3916)、「淡路の島」(512・951・1164・3649)があり、多数詠まれている。勅撰集においては、『拾遺集』に一首(926)に「淡路島」が詠み込まれ、同歌は『万葉集』(321)に見られ、しかも「古今和歌六帖」(1958)にも引用されている。

926 すみよしの岸にむかへる淡路島あはれと君をいはぬひぞなき

この「淡路島」は、アハの同音繰り返し返しの序として用いられている。私家集では、散見するところに拠ると、「淡路島」は『為仲集』34(『私家集大成中古II』40)に「淡路にて、はるひのてるに、人のなげきて

いのりするに、神にさうしをつづりたてまつるにかきし三首」という詞書がある中の一首に、

34 淡路島あはれとみてやその神の天くたりまし跡もたれけん
とあり、やはり「淡路島」は同音の振り返し順序とした詠法である。
また、『躬恒集』25（『私家集大成中古I』29）に、「淡路」に同様な修辞を用いた歌がある。

25 淡路にてあはと雲居に見し月のちかきこよひのところからかも
このように、「淡路島」は、『万葉集』に多数詠まれ、修辭的な詠法がみられる。

『堀河百首』において、「淡路」に關した歌枕、地名、名所は、「淡路島」(144)と「淡路の瀬戸」(142)が上げられる。「淡路の瀬戸」は、『万葉集』に例はなく、新たなものと推察される。「淡路島」が詠まれたのは、源師頼の歌(144)である。

144 淡路島絵島か磯にあさりするたなゝし小舟いくよへぬらん
この歌の「絵島か磯」は、淡路島北東部にある景勝地で歌枕、地名、名所である。「絵島か磯」は、成立以前の勅撰集に例のない歌枕、地名、名所である。柵なし小舟は、古く、『万葉集』に見える歌語であり、絵島か磯で漁をしている柵のない小舟の様子を描いている。

また、「絵島か磯」は、『為仲集』37にあり、前掲の歌三首の後に配列されている。

37 いかなれば絵島か磯をかきたえていまゝて人のおとせさるらん
また、『散木奇歌集』814の詞書の一部分に「くたりさまに、あはちのゑしまを、面白と聞きおきたる所也」とあり、「絵島」が詠まれている。
『堀河百首』詠出当時において、「絵島」は、注目された歌枕、地名、名所と言えるであろう。

814 思ひきやゑしまみしよのあけほのにけふのあかしの袖のけしきを
このように、「絵島」に關連した歌枕、地名、名所は、『堀河百首』

詠出当時の歌人達が関心を示している。しかも、「絵島か磯」「絵島か崎」「絵島か浦」と多岐にわたっている。それらは、『千載集』(989・990・1050)や『教長集』887（『私家集大成中古II』89）、『山家集』553（『私家集大成中古I』1）等に詠まれている。そのようなことから推すると、「絵島」に關連する歌枕、地名、名所は、『堀河百首』詠出時期を契機に広く流布したものと捉えられるであろう。

次に、「淡路の瀬戸」は、大江匡房の歌(142)である。

142 おほしほや淡路のせとの吹わけにのほり下りのかたほかく覽
この歌の初句を「おほしまや」という伝本があり、「大島」を『堀河百首初度百首抄』では「大島瀬戸也又備前周防伊豆同名あり」としている。

「淡路の瀬戸」は、新奇な歌枕、地名、名所で、潮の干満の激しいところで横風を受けて帆走する状態から航行の困難さを詠じている。

このようなことから、「絵島か磯」、「淡路の瀬戸」は、「淡路」に關連した新たな歌枕、地名、名所であり、それぞれ新味を意図したと言えるであろう。

「猪名野の沖」の「猪名」に關しては、田尻嘉信氏が既に詳細な論考でご指摘のとおり、古く『万葉集』から「猪名野」(279・114)「猪名湊」(278)「猪名山」(2108)がみえ、「猪名」に關した歌枕、地名、名所が詠まれている。

勅撰集では、『拾遺集』(586)に「猪名伏原」があり、『後拾遺集』(709)では「猪名の笹原」があらわれている。

『堀河百首』において、「猪名」に關連した歌枕、地名、名所として「猪名伏原」(999・1403)、「猪名湊」(986)、「猪名野の沖」(1446)、「猪名端山」(1464)が挙げられ、数多く見出せる。そのように「猪名」は、『堀河百首』詠出歌人達に注目され多様さを示した歌枕、地名、名所

と言え、殊に「猪名野の沖」「猪名端山」は、以前に散見されず、新たなものと捉えられるであろう。

999 しなかととりあな伏原風さえてこやの池みつ氷しにけり(氷・仲実)

1403 むかしみし道たつぬれとなかりけりぬるてましりのあな伏原(野・基後)

986 風さむみ夜やふけぬらむしなか鳥あな湊に千鳥しはなく(千鳥・藤原仲)

1464 しなか鳥あなのは山に旅寝してよはのひかたにめをさましつ(旅・俊頼)

『万葉集』以来、「猪名」の枕詞「しなが鳥」と共に詠作したものが多数を占めている。「猪名野の沖」は、源頭仲の歌(1446)に、

1446 おほみ舟あな沖のやしほちにからる計そまかちしけぬく

とあり、この歌は、「猪名野の沖」の初出歌であろう。「真槿しけぬく」は、田尻氏のご指摘(4)のように、『万葉集』に多くの例を挙げられ、櫓をいそがしく使う意であるとされている。また、「大御舟」は、天皇などのお乗りになる舟のことで、『万葉集』にみえ、『万葉集』(151・152・1175)以外にはあまり例を見ない歌語である。いずれも万葉歌を証とするのは明らかであり、新たな「猪名野の沖」を詠み込んで新味を盛り込んで仕上げたと思われる。

「大御舟」は、『堀河百首』の「海路」、藤原頭季の歌(1445)に詠じられている(3)。

1445 おほみ舟したなになみはかくれともふちとをさして島つたひゆく

この歌の「藤戸」は、岡山県小島半島の基部にある地名で、『散木奇歌集』709(『私家集大成中古II』62) 旅宿の部に

709 定なき空のけしきにおひ風をまつにふちとをかけてさりぬ
とあり、「藤戸」は、あまり散見されない歌枕、地名、名所であると言

えるが、『堀河百首』詠出歌人達に注視されたものと言え、少なからず、新奇な歌枕、地名、名所を意識した詠歌と捉えられる。

「伊良湖崎」は、『万葉集』において、詠じた歌はないが、「伊良虞島」は、三首(23・24・42)見られる。勅撰集には詠まれず、『万葉集』以外、「伊良湖」の関連したものは、あまり散見されない歌枕、地名、名所のように思われる。

23 打ち麻を麻統王海人なれや伊良虞島の玉藻刈ります

24 うつせみの命を惜しみ波に濡れ伊良虞島の玉藻刈り食む

42 潮騒に伊良虞島の島辺漕ぐ舟に妹乗るらむか荒き島廻を

だが、「伊良湖崎」、「伊良湖島」は、『堀河百首』や『堀河百首』詠出歌人の私家集には散見される。「伊良湖崎」は『堀河百首』において二首(1301・1443)みえる。藤原頭季の歌(1301)は、「松」の歌題で、同歌は、『頭季集』(202)、『千載集』(1401)、『続詞花集』(752)に入集している。もう一首は、源国信の「海路」の歌(1443)である。

1301 玉もかるいらこか崎のいはね松いく世までにか年のへぬらん

1443 波のおるいらこか崎を出る舟は早こきわたせしまきもそする

この二首いずれも、『万葉集』の詠歌を少なからず意識した詠作と言える。1301は、『万葉集』23・24の「玉藻刈る」が詠み入れられ、1443は、『万葉集』42を発想の典拠としたと推察され、『江師集』50(『私家集大成中古II』51)に

50 あまのがるいらこかさきのなのりそのなのりもはてぬほととぎす
かな

とあり、「伊良湖崎」は、『堀河百首』詠出当時に詠出されていた歌枕、地名、名所と捉えられる。また、『万葉集』以来、散見されない「伊良湖島」は、『基俊集』112(『私家集大成中古II』68)に
112 白波のいらこか島の忘れかひ人忘るとも我わすれぬや

とある。

また、源頭仲と親交がうかがえる『忠盛集』108(『私家集大成中古II』75)に

108 なみよするいらこかさきの松風をたれもしはしまくらにそする
とあり、『山家集』1388、1389(『私家集大成中世I』1)、『寂身集』41(『私家集大成中世I』36)、『玉吟集』949(『私家集大成中世I』49)に見え
る。

このように、「伊良湖崎」「伊良湖島」は、『堀河百首』の詠出歌人達に注視された歌枕、地名、名所であり、その頌を機縁として、その後
に流布したものと推察が可能であろう。

「大島」は、『堀河百首』成立以前の勅撰集に見出される歌枕、地名、
名所で、『後撰集』に二首(593・829)見られ、この二首いずれも恋の部
立に配列されている。そのうちの一首(829)は『古今和歌六帖』(2920)
雑思、「むかしある人」に分類され、『古今和歌六帖』恋の分類には「大
島」が詠まれた歌は散見したところに拠るとこの一首のみである。

593人しれず思ふ心はおほしまのなるとはなしになげくころかな
829おほしまに水をはこびしはや船のはやくも人にあひみてしがな

また、私家集をみると、「大島」は『後撰集』と同様にやはり恋
の歌が数多く散見される。殊に、「大島鳴門」や「大島の門」「大島の
瀬戸」などと詠まれ、「大島鳴門」は、『万葉集』(366)の詞書に見出さ
れる。それらは、いずれも「多し」に懸け、「鳴門」「門」「瀬戸」に「戸」
を懸けるという技巧的な修辭に拠った作法が多数を占めている。例え
ば、『一条摂政御集』(『私家集大成中古I』87)では、

をんなの、とをおしたてゝいりにければ、あしたに

110 さなからもつらき心は大島のなるとをたてしほとわひしき

かへし

山大島やなるとさすともおもほえず波こそよりてたつときしか
とあり『惠慶集』243(『私家集大成中古I』104)の百首歌の恋の部立に
243おほしまやせとのしほあひを行舟のかちとり

とある。このように「大島」は、技巧的な修辭に拠り、恋情を絡ませ
た作品がかなり見られる。また、『惠慶集』65に

おほしまのなるとゝいふところに、しほみちてとまりて、しほ
のひるまつとて

65都にといそくかひなく大島のなたのかけちはしほみちにけり
とあり、「大島」が、潮の干満には、潮が激しく流れ、航行の難所であ
る鳴門の有様を詠じている。「大島」の航行の困難さを詠じたものとし
て『大式高遠集』214(『私家集大成中古I』152)に

おほしまのとわたるとて

214大島やとはたる舟のかちまくらおつるしづくにぬらつゝそゆく
とあり、このような作例は限られている。

『堀河百首』においては、隆源の歌(1453)の一首のみである。

1453終夜おほ島あらしおろす也たかさこ舟は今そ出へき

「大島」は、『八雲御抄』や『五代集歌枕』には、備前国と記している。
また、「大島の鳴門」は、『万葉集』に見え、周防国にあり、未詳であ
る。「たかさこ舟」は、播磨國の舟のことで、証例が少なく、新奇な歌
語に拠って新味を盛り込んだと言えよう。

このように、「大島」は、『万葉集』以来、継承されている伝統的な
歌枕、地名、名所と言えるであろう。

「由良の門」は、『堀河百首』成立以前の勅撰集、歌合に主題や歌題
として見出せないが、「由良」というのは、『万葉集』において見出せ
る。1210には、「紀伊の国湯羅の岬」とあり、1210・1674・1675の三首に「由良
の崎」が詠まれている。だが、『万葉集』には「由良の門」は、詠まれ

ていない。

「由良の門」は、『曾根好忠集』（『私家集大成中古Ⅰ』105）には、410ゆらのとをわたるふな人かちをたえ行ゑもしらぬこひのみちかなとあり、百首歌の恋十に載せられ、「由良の門」の初出歌と言える。「由良の門」は、『五代集歌枕』『八雲御抄』には、紀伊の国の歌枕と記されている。だが、この「由良の門」は、丹後の由良とする説がかなり強い。

また、「由良の門」は、『堀河百首』詠出歌人の私家集である、『散木奇歌集』1287（『私家集大成中古Ⅱ』62）や『基俊集』63（『私家集大成中古Ⅱ』68）に各々一首ずつ見出される。

1287風をいたみゆらのとわたる柴舟のしはしこかれてよをすこさはや63なそもかくゆらのと渡るあま舟のかちとるまなく物を思ふは

この二首、いずれも前掲の好忠の歌を少なからず意識しの作意の歌であり、述懐歌に仕上げている。また、『散木奇歌集』恋下に、「ゆくゑもしらぬ恋もする哉」という、好忠の歌の下句を詠じた歌が書きあつめられている。（1224～1233）その十首のうち、1231の歌において、

1231よさの浦に島かくれ行つり舟のゆくゑもしらぬ恋もする哉

とあり、俊頼は好忠の歌を意識していると思われる。このことからすると、「与謝の浦」は、丹後国の与謝の浦と捉えられ、少なくとも、俊頼は「由良の門」を丹後国と見ていたと考えることも出来るだろう。

『堀河百首』において、「由良の門」は藤原顕仲の歌（145）で

1450かけさかりゆらのと渡る柴舟のこきくれたる歎きをそする

とあり、やはり述懐歌に仕立て上げている。この歌は、前掲の『散木奇歌集』1287の二、三句の一致が見られ、何らかの影響関係が認められるであろう。殊に、「柴舟」は、以前に歌語としてあまり例がみられない。

しかし、「海路」の歌題において、俊頼の歌（144）や『散木奇歌集』1287・1388にみえ、1388には「しはをふね」を見出せる。

1388しはをふねまほにかきなせゆふしてゝにしの宮人かさまつりしつこのように、「柴舟」は、俊頼詠歌に多くの例を上げられることから、俊頼特有な歌語と捉えられるだろう。

以上のことから、「由良の門」は、初出の好忠の歌の影響を踏えながら、『堀河百首』詠出歌人達に詠まれた歌枕、地名、名所と受け取るこ

とが出来てであろう。

以上のように、「海路」に詠まれた歌枕、地名、名所をみてみると、『万葉集』に典拠を求めたものとしては、「武庫の浦」「奈具の浦」「もとめ塚」が挙げられる。そのうち、「もとめ塚」は、源俊頼の独自の歌枕、地名、名所と言えらるであろう。また、『堀河百首』において、新たに歌枕、地名、名所とされたものとしては、「淡路の瀬戸」「絵島が磯」「猪名野の沖」「伊良湖崎」「由良の門」がある。それらは新しい歌枕、地名、名所であるが、各々それらに関連した歌枕、地名、名所が『万葉集』に見出される。

しかも、それらのうちの「淡路の瀬戸」以外は、『堀河百首』詠出歌人達に拠って注目されたものである。また、『堀河百首』詠出当時を機縁に広く詠まれるようになったと思われるものとしては、「絵島が磯」や「伊良湖崎」の二ヶ所である。

「海路」に見える歌枕、地名、名所のうち、「天の橋立」「大島」が比較的詠み込まれているもので、その他の多くは、『万葉集』に典拠を求められる歌枕、地名、名所や新たなものであり、しかも、『堀河百首』詠出歌人達に拠って注視されたものである。それらは、少なからず、「海路」における歌枕、地名、名所の特徴の一つとして指摘できるであろう。

このように、『堀河百首』詠出歌人達が、『万葉集』に典拠を求めたものや新たな歌枕、地名、名所を詠み込むという工夫は、すくなくと

も「海路」という新しい歌題であるということと無関係ではなく、積極的に歌題を詠もうとする一つの傾向であり、詠歌世界の拡大をも意図していると思われる。

〈注〉

- (1) 拙稿「堀河百首雑の歌題覚え書」(「文芸論叢」第17号 昭56・3)
- (2) 田尻嘉信氏「堀河百首名所考」(「跡見学園短期大学紀要」第13集 昭52・3)
- (3) 田尻嘉信氏「元永六年十月二日『内大臣家歌合』の名所詠」(「跡見学園国語科紀要」第34号 昭61・4)
- (4) 注3に同じ
- (5) 藤原顕季の歌に異伝歌が見出せる。
1445いかはかり浪路越分て過ぬらん都のかたの雲がくれゆく
橋本不美男、滝沢貞夫著『校本堀河院御時百首和歌 本文、研究篇』(笠間書院 昭51・3)
- (6) 竹下豊氏「堀河百首」と詠出歌人の別詠—堀河百首研究(二)—
「女子大文学 国文編」第三十七号 昭61・3

引用した『万葉集』、『古今六帖和歌』は、『新編国歌大観』(歌番号も同本に拠る)に拠った。ただし、表記については改めたところがある。